

研究

ヒブル思想に表はれたる宇宙の 形態に就いて

一

片 桐 哲

ヒブル人は如何なる宇宙觀を懷いて居つたか、宇宙の形態を如何に心に劃いて居つたかと云ふ事は、ヒブル人の文學、宗教、又は歴史の研究者に取つては、極めて興味あり且つ又重要な問題でなくてはならぬ。然るに之の點に關しては、聖書の中には舊約にも新約にも、何等明瞭なる叙述の箇處を見出す事は出来ない。僅かに創世紀第一章及び第二章の、祭司典及びヤウエ典に屬する天地創造説話の記事と、詩的文章又は默示文學の中に、神の創造又は大能の御業に關して、斷片的に言及せる數ヶ所の章句を持つ丈けに過ぎない。之等の記事より精確なるヒブル人の宇宙觀

を組立てる事は中々容易な事ではない。

ヒブル語の中には、^{コズモス}Cosmos と云ふ様な只一語で、宇宙を言ひ表はして居る文字は見當らない。之を言ひ表はすには、吾等東洋人と同様に、「天と地」[*hashtshamain w'ha'areg*] と云ふ句を用いて居る(創一、詩八九二、エレミヤ一〇三、五一^{一五})。舊約聖書中に普通、「世界」と譯されて居る *Tebhel* と云ふ言葉がある。然し此の語は、地球を意味する *Yereg* と云ふ語と對等に使用さるゝ言葉で、其の適用は更に狹義である様に察せられる。之の語は詩篇及び其他の詩文中にのみ使用されて居る故に、特殊の詩的聯想を持つた語であらうと思はれるが、決して吾人の要求する様な宇宙を意味する語ではない。故にヒブル人の宇宙觀を窺ふには、どうしても彼等の「天」と「地」との觀念を考察する外は途はないと思はれる。

二

「天」と譯されて居る、ヒブル語は、決して只一つ丈けではない。穹蒼を意味する *raqia'*、高きと思はしむる *ma'alon* 氣象を主として見たる *Shamayim* 等がある。然し尤も多く使用さるゝは *Shamain* と云ふ語である。如何なる語源の言葉か、種々に憶測されては居るが、未だ詳にする事は出來ない。此等の言葉を通して、舊約聖書中に示さるゝ天の概念は、第一には宇宙の上半部を指す事

である(創一^六)。更に狹義にては穹蒼即ち青天井を指す事である(創一^六)。之の穹蒼は又種々なる言葉で形容されて居る。例へば「天を幕の如くに張り」(詩一〇四^三)、「おほぞらを薄絹の如く布き、之を住まふべき幕屋の如く張り給ふ云々」(イザヤ四〇^三)の如く、天を幕屋又は薄絹の様に感じて居る。或は又、天は何にか堅固なる基礎、若しくは柱の上に立てられて居る如くにも感じて居る。例へばサムエル後書二^八には「天の基動き震へり云々」、ヨブ記二六^二には「彼叱咤たまへば天の柱震ひかつ怖る云々」(箴言八^三参照)と歌ふて居る。而して其の美觀に至りては「透明る青玉」(出埃及二四^一)。「堅くして鑄たる鏡の如くなる穹蒼」(ヨブ記三七^二)と歎美して居る。又神はそこに恒星及び惑星をちりばめ給ふと見て居る(創一^七、イザヤ一四^三、三四^四)。天には尊い神の玉座(イザヤ六^六、六六^一)、聖き神殿(ミカ一^三、ハバクク二^三)、詩一一^四)が設けられて居ると見る。又是と同時に、其處には神の左右に侍べる多くの神の子達又は天使達の住家があると思倣されて居る(ヨブ一^六、二^二)。此の最後の思想はバビロン俘囚時代以後、益々發達して新約時代に及んで居るので、新約聖書中にはよく見えて居る(マタイ一八^一、二二^{三〇}、黙三^五)。

以上の天に關する觀念は、可成興味あるものではあるが、然し天の形態に關して適確なる概念を提供して呉れない。詩的形容を以て、或は天幕の如く、或は薄絹の如く張られたる姿を想像せしめ、又は、柱又は基礎の上に据ゑられたる、堅牢なる透明體の圓天井を想記せしむるに過ぎな

い。是等の形容は皆詩的表現であるから、之等の言葉を使用せるヒブルの詩人達は、文字通りに斯く天を觀じ、又は想像して居つたか否かに就いては、充分批判の餘地がある。若し文地通りの解釋を極端に適用すれば、「天よきけ、地よ耳を傾けよ云々」(イザヤ一三)の句より、天地とも圖に畫くに當つて、天と地に對し各々耳を附けねばならぬ滑稽事に墮せぬとも限らぬ。

三

ホワイトハウス

Whitehouse, Owen C. は、以上の如き章句其他を材料として、ヘスチングス氏聖書辭典中に、

ヒブル人の宇宙觀を圖解にして掲げて居る (Hastings' Dictionary of The Bible, vol. i. p. 503)。

之の圖は縱斷面であるが、あらゆる方向に、果てしなく延長して居る大海水の最中に、厚味のあつた平圓盤様のものが立つて居る。即ち地球を示して居るのである。其地球の胸腹に、楕圓形をなして介在して居る洞穴は、死人の住處であつて、之を She'ol と稱ぶ即ち黄泉である。之の地球なる平圓盤の周圍には、高い山嶽が凡立して居り、之を土臺とし、柱として(ヨブ二六^{一〇一二}、アモス九^六、箴八^{七一二六})、堅牢なる大穹蒼(ヨブ三七^{一二})が半球を畫いて立つて居る。此の半球狀の穹蒼には幾つかの孔口(天の戸、創七^{一二}、王下七^{一二})が切られて居る。勿論天上の水(詩一四八^四)が雨となつて地上に降下する所を示すのであらう。又地球にも幾條かの水門を切つてあり、地下の大水

と相通せしめて居る。ノアの洪水の記事(創七二)を説明せんとする用意であらう。又大穹蒼の内側に日月星辰を點在せしめて居る。

之の圖は或る意味に於て、誠に巧妙なる組立であると云へよう。然し之れには Warren 氏 W. F. が指摘して居る様に幾多の困難と無理と撞着との存在するを否む事が出来ない (W. F. Warren: The Earliest Cosmologies, p. 19-25)。第一に之の圖に従へば、天と地とは宇宙の全てを包括して居らない事になる。何故なれば天と地の外側に無限大の擴がりを持つ水を存在せしめて居るからである。又太陽や月が互に交代する際に、引退すべき場所の用意が何處にも設けられて居らない。是は大きな缺點と云はねばならぬ。更に地球を平圓盤様の形態に畫けるは、イザヤ書四〇三の *hagh* と云ふ語を根據として居るのであるが、之の語は只に地球に使用さるゝのみならず、より多く天に對して使用されて居る語である(ヨブ二二^四、箴八^二)。《Hebrew & English Lexicon of The O. T., by Briggs, Brown, Driver, p. 295 に従へば此の語は、天の穹蒼にのみ使用さるゝと記してある。日本譯にては「地球の遙か上」(イザヤ四〇三)、「天の面」(箴八^二)、「天の穹蒼」(ヨブ二二^四) などゝなつて居つて不統一である。故に若しイザヤ四〇三の *hagh* を地球の平圓盤と譯せば、ヨブ記二二^四 天の平圓盤と譯さねばならず、圖にて天空を圓板狀に畫かねばならぬ撞着を招く事になる。

四

ホワイハウス
Whitehouse

氏の圖解は、前述の如く種々の困難に相遇する故に、ヒブル人の宇宙觀の正しき概念を與へて呉れない。之の謎の正體を鮮明ならしむるには、内部的光は、餘りに貧弱であり斷片的である。之を明瞭ならしむる爲には、どうしても其の近くに強く輝く外部の光に待たねばなるまい。即ち文學・宗教・法律等あらゆる方面に於て、ヒブル人の先輩であり、師表であつた、バビロニア人の宇宙觀の光に照して見れば、必らずやそこに何等かの暗示を提供せらるゝに相違あるまい。

バビロニア人の宇宙觀の中心は、コペルニクス以前の凡ての宇宙觀と同様に、地球である事は勿論である。而して此の地球の形態は、上下全く同形であつて、共に四等邊ピラミット型の七階層 (E-KUR, Tupukait) から成り立つて居る。上部の七階は光明と生命の世界で、生ける人類の住處であり、下部の七階は暗黒と死の世界で、死人の住家である。之の上下二部は、深い滯水を以て區分せられて居る。之の地球を取巻く七つの天と、七つの地獄とがある。之れは黃道帶を以て兩分されて居る。此の第七の天の上に、更に第八の天が在つて、之れは「最高の天」と稱ばれて居る。是は恒星の座であつて、又最高神「アヌ神の天」とも稱ばれて居る。その下部の天はエア神

の支配する處である。七つの天界を地球より算へて、Sin 神(月)、Shamash 神(日)、Nabu 神(水星)、Ishtar 神(金星)、Nergal 神(火星)、Marduk 神(木星)、及び Ninib 神(土星)の天として知られ、各自の領域である(W. F. Warren: The Earliest Cosmologies, p. 33-40, New York, 1909)。之の均齊のとれた、秩序整然たる宇宙觀は、バビロニア文化の波及と共に各所に其の痕跡を止めて居るのを見る。例へば上下對等の形相をせる地球觀の如きは希臘のピサゴラスの *γῆ* (地球) 及び *ἀντίγῆ* (反對地球) の思想の中に認める事が出来る(O. F. Gruppe, Die kosmische Systeme der Griechen, s. 82)。之のバビロニアの宇宙觀は、後にプロレメウスを通じて、コペルニクスに至るまでの各時代の哲人又は詩人の宇宙觀に感化を與へて居る。其餘韻は夫のダンテの神劇及びミルトンの失樂園にも聞く事が出来る。其の中には明かにバビロニアの天界地獄觀の反響を認めらるゝであらう。

五

バビロニアの宇宙觀の影響は、前述の如く、血屬を同ふせざる西方諸國に迄も廣く波及して、長く續いて居る點より省みて、更にバビロニア本國に接近し、其の民族と姉妹人種であり、且つ上古より其の宗教・文學・法律・制度等あらゆる方面に於て、間接、直接に、其の感化に浴し來

つたカナンの地に、其の宇宙觀の痕跡を印せずしては措かない筈である。ヒブル人の間に行はれて居つた、年始を春に置く曆法の如き、十二ヶ月の名稱の如き、直接天文に關する知識は、之れ皆彼等がカナン定住以後、バビロニヤ文化を持てるカナン土着民より學んだものである。如斯く天文學的知識に於てカナン人を通して、間接にバビロニヤ文化を學べるヒブル人が、それと尤も密接なる關係にあるバビロニヤの宇宙觀に對して、無關係であるべき筈はない事も亦明かであらう。是等の一般的考察を土臺として、バビロニヤの宇宙觀の光に輝して、ヒブル人の宇宙觀を一瞥して見たい。

先づ第一に思ひ當る事は、ヒブル語の「天」と云ふ言葉は *Shimaim* にしろ、*Shajim* にしろ、共に複數の形である事である。夫の「天と諸天の天」(申命一〇「列王上八」^三、詩一一五「^六」の句の如きは、尤もよくヒブル人は、天を複數的に考て居る事を示すものではあるまいか。之の「天」なる名詞の複數形に就いては、「神」(*elôhim*)と云ふヒブル語の複數形の問題を論義せらるゝ際に、よく言はれると同様に、或は威嚴性を示す複數形、又は無限性を表はす修辭的複數形であると論ずる學者もある。然しヒブル語には如斯き威嚴又は無限性を表示する爲めに、文法上又は修辭上複數を使用するが如き方法は少しも知られて居らない。殊に複數形の「天」の他に、「諸天の天」と云ふ言葉を度々使用して居る所を見れば、其の複數性は之を使用せる聖書記者達の明かに意識

して居つた證左と見なければならぬ。之の多元的天界の思想は、新約聖書にも明瞭に認むる事が出来る。夫の有名なる使徒パウロの「第三の天」(コリント後一二三)は無論の事、「諸の天の上に昇りし者云々」(エペソ四一〇)、或は複數にて曰ひ表はされたる「天の處にて」(in totis regionibus, エペソ一三三、一三六、一三九、一六三)の如きそれである。又希伯來書の記者は、キリストに關して「諸の天を通り給ひし偉なる大祭司、神の子イエス」(四一四)、「聖にして惡なく穢れなく惡人より遠ざかり諸般の天よりも高くせられ給へり云々」(七二三)と敘述して居る。如斯、舊新約を通じて、ヒブル人の思想中には、天界を單一のものと見ずして、複數に考へて居る點を充分に認むる事が出来る。

茲に問題として残るは果して、ヒブル人は天界を三個と觀じて居つたか、或は七個と見做して居つたかと云ふ事である。オリゲネスを始めとして、七天説を否定して、三天説を主張する學者もあるが、諸民族の宇宙觀の比較研究の光に映じて考察すれば、どうしても「七つの天」の觀念を懷いて居つたと推察される。(S. D. F. Salmond: *Hastings' B.D.* vol. ii, p. 322; vol. iii, p. 671)。之れに就いて、一つの暗示を與へて呉れるものは、ソロモン王の玉座の構造である。即ち六階の階段(列王上一〇二八二〇)を経て玉座に達する様式である。之の構造は、ラビ學派の解釋する様に、明かに第七の天に位して、其の下に六つの天界を見下さるゝ神の寶座の象徴であると思はれ

る。而して此の六つの階段に十二の獅子の像が立つて居るのも明かに天の十二宮を象徴したものである。と思はれる。

紀元前二十年頃アレキサンドリアに生れし、夫の有名なる猶太人フィローは、尤も明瞭に、七つの天の思想を表白して居る。即ち彼は中心を同じうする七つの天が、之等全部を掩ふて居る第八の天と共に、地球の周圍を廻轉して居ると見て居る (Hastings' B.D., extra-vol., p. 200, "Philo," by J. Drummond)。

之等の點より見て、ヒアル人にはバビロニヤ人及びベルシヤ人と同様に、七つの天の觀念を統襲して居つたものと推察されるのである。

六

次に地球の形態に就いての思想であるが、聖書にはバビロニヤ的な方形七階層のピラミット型の地球觀を明示する箇所は殆んど見當らない。僅かに退化せる方形的地球觀としては新約の黙示録の記事中に見出す事が出来る。「我れ四人の御使、地の四隅に立つを見たり、彼等は地の四方の風を引止めて云々」(七)又は「都は方形にして、その長さ廣さ相均し云々」(二一)の如き文字がそれである。此の種の思想は廣く、默示文學に見らるゝもので、ダニエル書の「四方の天風」

(七)も之れと軌を同じふするものと思はれる。ホワイトハウスの圖解の如き圓盤形の地球觀はヒブル人の思想には見當らないものと思はれる。

七

以上の考察に依つて、バビロニアの天と地との觀念が、ヒブルの宇宙觀の背景をなして居る事は幾分明かになし得たと思ふが、然らば何が故に、ヒブル人の思想より——殊に七と云ふ完全數を、好愛し尊重した、彼等の思想より——七つの天及び七階の地の觀念が姿を消して了つたのであらうか。之の疑問に對して、其の最大の原因は強烈なるヒブル人の一神教的信仰の結果であると思ふ。バビロニアの七つの天は既に述べたる如く。月神ジン、日神シャマシ等七つの神がそれ／＼其の一つを支配する領域であつて、七つの天の思想は取も直さず最も甚だしい多神禮拜の表白を意味する事となり、全宇宙の唯一の主宰者なるヤウエ神以外には何等禮拜の對象を許し得ないヒブル人に取つては、之れ程恐ろしい罪はないからである。従つて七つの天界の支配神の名稱は漸次ヒブル人の記憶から消失して了ひ、僅かに「天」なる名詞の複數形や「諸天の天」などの言葉の端しに、過去の名殘を留むるに過ぎなくなつて了つたものと思はれる。

次に七階の地球の觀念の消失は、七つの天の場合と少しく趣を異にして居る様に思はれる。一

神思想の強烈なりし以外に、ヒブル人とバビロニア人との建築様式の差異からも來て居ると思はれる。バビロニアの神殿には Ziggurat (cf. E-KUR, Tupaia) と稱して地球を象徵したる階段式の塔が建つて居たのであるが、バビロニア帝國がカナンに勢力を扶植して居た古代に於ては、到る處にバビロニアの神殿が建てられて、其の神々の禮拜が行はれて居つた事は、カナンの古き地名の遺跡に依つて察知するに難くない。其の當時に於てはバビロニアの宇宙觀は其儘生きて居つたであらう。然し其後バビロニアの勢力はカナンより消え去り其の神殿も頽廢して了つたので僅かに過去の記憶とのみして保持して居つた時代にヒブル人は侵入して來たのである。而して土着民より、バビロニアの宇宙觀を學び、七階の地球觀をも知つたのであらうが、彼等は其の真相を想像する事能はず、僅かに方形的地球觀を懷くに止まつたものと察せられる。夫のバベルの塔の傳説は最もよく此の傾向を物語るものではあるまいか。バベルの塔の形態は元來は前述の Ziggurat であつたに違ひない。然るに單なる高い塔として畫かれて居るに過ぎない。如斯くして新來のヒブル人は、元來は七階の地球觀であつたものを、充分領解する事能はずして遂に單なる方形様のものとして考ふる様になつて了つたものと察せらるゝのである。